

10月が終わり11月に突入するかという今の昼下がり、安威川河川敷にきている。土手の階段を降り、右にするか左にするかと思案の末、今日は左側、川の流れに反って走り出した。右にするか左にするかと迷うのは、去年から川下の橋の工事で河川敷遊歩道が通行禁止になっていたが、半年ぐらい前に解除された。一年か一年半ぐらいはずっと右側、川上に向かって走っていた。それがいつの間にか川下の通行止めが解除され、「お 行けるんだ うれしいねえ」と右や左とその日の気分で、流れに沿ったり逆らったりして走っていた。ところが今度は左側の川上で、「まもなく通行止め 河川内整備のため」と看板が出だした。「またか」と右側の川下ばかり走っていたが、昼間の用事で夕方になった時間、「5時以降は工事はないのでは」とたかをくくって川上に走り出した。まだ秋が始まったばかりの季節だったので、日暮れの時間も遅く、6時ころには通行止めの看板の中を通り抜けた。もっとも帰る時間には暗くなってきて自転車のところに帰り着いたころには真っ暗になっていた。じつは夜の川下は嫌なのである、どうも気持ちが悪くて嫌なのだ。今でこそなんだか人が多くなってきたけれど、10年15年前までは昼間でも人に会うのは1,2度程度、野良犬の群れがいる、鳥がぎゃ〜と舞う、草ぼうぼう、暗い山を平気で歩くオレも、「なんだかいやなんだね」ということが今も続いているのです。そんなこんな、河川内整備工事は簡単に終わり、今は右も左もいつでもご自由にどうぞという状態なのです。

左の川上の終着点、安威川と茨城川の二股地点で、「磯辺さんの病院は 遠いのかな」と頭の中でぐるぐる検索してみた。何日前、「ええい もう少し足を 延ばして」と国道171号線の手前の階段を上がってみた。「なんだ、ここから歩いて 5分もかからない」大発見である、「土地勘というものは あっちからと こっちからでは まったく違う こんがらがるね」と我ながら苦笑。そういうわけで、汚い運動着、運動帽で植物状態の彼の様子を見舞に行った。その時はひと月ほど時間が空いていたので、「まだ居る やろうね 死んで ないよね まさか 目が開いてないよね」と顔を見て、ほっとして帰った。昨日も、「ここまで来たから 寄ってみるか」と同じスタイルで、顔を見て帰った。「ええい いつ行っても おんなじだ あいそも くそもねえ」なんて悪態をつきながらもなんだか捨てておけない。身内のない彼は、おそらくどなたも見舞いには来てないのだ。

秋になるとススキがきれいだ。ススキの穂が出だした頃は、ずっと清潔に精悍に上に向かっていているが、徐々に白くなり、秋真っ盛りのは夕陽に光って、キラキラ輝くそのさまが何とも言えない。晩秋にもなってくるとその白さが綿状になり、キラキラから、ぼんやり、白いぼんぼりになってくる。群生がいいねえ、ちょっと斜めの山肌、ぽこり膨らんだ山肌、そんなところに白い光が風になびいて流れて見える。まだ草が緑色を保っているときもいい、褐色に枯れてしまってもいい、白の光が流れるのはいい。真っ赤に燃えるモミジより、レモンイエローにそよぐ、葉っぱの中を歩くのがいい、ススキの群れと、黄色の葉っぱ、どっちがいいかねえ。

今日も空がきれいだ。盛夏を過ぎたあたりからか、「お 今日の空はきれいだなあ」と驚き見上げる日が秋になると多くなってきた。青空というが、目の前の展開次第、ぐり見渡す目の位置次第、青の色がどんどん変化する、こちらは青の絵の具に黄色をちょっと混ぜ、そこに緑色をちょっと混ぜ、いやいやバイオレットが必要だ、しかも重いバイオレット、こいつが入るとその青が爽やかになる、本当かね。入道雲、まだらな雲、雲の白さも真っ白からどす黒いグレーまで様々だけれど、そのどす黒さも、許せる美しさだ。「お前に 許しなど 乞わない無礼者目」と天の声が届く、自然はいい。

地震と台風のダブルパンチに見舞われ、家主から退去を迫られている人の話。まず地震で築50年以上たったボロ家、瓦・壁と打撃を受け、ブルーシートで何とか過ごす矢先、台風の風でまたもや大打撃。「修繕は不可能なので 50万円で 出て行って」という話。オレのまわりに家主と借家人、両立場の知人がいる。住まいが不安定は、なんとも心細い。オレはアトリエで安穩としておられる、ミマイ キクマイ イウマイ である。

半年間準備をしてきたバスツアーの日、定刻の15分前にバスが止まるところに行けば、「みんな乗って 待ってるよ」という、年寄りには約束の時間より早いとわかっていながら、オレが一番最後だった。若いころは待ち合わせといえば、みなさん定刻かやや遅れ気味で、やっと集合、というのが当たり前だったが、60歳前後から、みなさんの集合は早い、人によっては30分前にきているという方もおられる。

茨木市が主催する“人権啓発”という団体が市内に20~30団体ある。このバスツアーは、近所の近所の小学校区四つと組んで毎年、人権啓発に役立ちそうな場所を巡って、バスツアーをしている。四年に一度幹事がまわってくる、今年度はオレの住まいの地区、オレが責任者の団体である。6月の“ふらふらペインティングの旅北海道-II”から帰ってくると、役所から、「もう申請日が過ぎているので 早速申請してください」と連絡が入っていた。地震でアトリエの片づけに追われながらも、何度か役所に通った。役所も地震の後片付けやら、住民の心配やらで、てんやわんやの状態だと思われるが、役所も補助金を出す以上、行先・目的・観光バス料金・各地入館料・当日の行動・等の申請を受け付け、審査をして、補助金の予算を出さなければいけない、と推測。

まずは行き先を決めなければ、人権啓発の趣旨に沿った行き先の具体的な場所、入館料やらの確認、昼食処の確認、そんなこんなで、M先生らと西宮に向かった。西宮には、「アンネ・フランクリンの資料館」を持つ、キリスト教の教会がある。市の人から、「あそこは 勧めますが 難点が 大型バスが入らないのでは」と言われていた。岡村車に三人が乗って、ナビにその教会の住所を入れ出発した。甲山の麓の住宅地、細い道をくねくね抜け、小さい教会に到着した。「こんな住宅と変わらない規模の教会 どんない資料があるのやら」といぶかったが、当日は見ることはできなかった。牧師と思われる方に、入館料や、説明時間等の詳細を聞き、「よろしく」と狭い道を国道に戻った。

次は昼食処と西宮の酒蔵の街に向かった。西宮の国道43号線付近にはいくつかの酒造会社の大きな看板がよきよき立っている。“灘五郷”という言葉は何かと調べると、昔から神戸市の西から東の五つの村：郷は、「酒米が手に入りやすい 宮水という酒造りに適した水が取れる 海が近く運送に便利であった」というような条件が重なり、中世近世からたくさんの酒蔵が建っているという説明がある。見学可能と書かれた看板の有名な酒蔵、車を止めぐるり見て回ったが残念ながらレストランはない。次は、と車を止めたところは、酒蔵の規模は多少小さいが、立派なレストラン、メニューを見て、「これならいけそう」と喜び入った。ツアーの当日ならこれぐらいがいいかなと2000円の御膳を頼んだ。あとは、バスが行ってくれるかどうか、と心配は残ったがリサーチは成功した。後日バス会社から、「残念ながら、バスが入らない」と連絡を受け大ショックのあと、「じゃあ 水平社と 榎原考古学博物館 これで行きましょう」とネットで検索、料金等を調べ役所に申請書を提出、バス会社の見積もり、食事処探し、土産物屋探しと、なんだかんだの雑多雑用をこなす日々を過ぎた。

水平社博物館・食事処・奈良県立榎原考古学研究所附属博物館・葛城道の駅、この四か所を回る。市からの補助金申請、これにはバス代の9割程度と、水平社の入館とガイド料10割の補助が許可された。40名の予定なので人数によってすべてか変化しそう、「いくら集めばいいのか 足らなかつたら 余ると どうして返金するのか」これまた雑多な悩みを抱えつつ、一人3500円と決め、保険のための個人情報、障害者手帳の有無、などを書き募集をおこなった。40名の予定が、32名になった、この数字で補助金の減額が気になるところである。

バスが出発して遠足が始まった。茨木から近畿道→南阪奈→榎原方面はかつて知ったら道、台高山系、東吉野村、伊勢街道、「ひんがしの のにかげろひの」と歌われた大宇陀方面への道である。水平社の住所が御所市柏原となっている。榎原市とばかり思っていたが、水平社は御所市のはしっこ、もう少しで榎原市というところにある。

水平社博物館は、国立とか市立とかの言葉がない、だれが運営しているのか検索すると、「博物館は 自治体に頼らず 入館料や寄付金で 運営されています」と書いてあるところを発見。

水平社に入ったらすぐに宣言の言葉がある。少年少女のころからまわりの様々な輩から、区別され差別され揶揄され、「おれの どこがいかんのか」「わたしのなにが そんなふうにならなければいけない」そんな怨嗟の言葉、恨み節がざわざわ聞こえてくる。オレの若いころの時代でも、平気で彼らを悪しざまに罵る人たちもたくさんいた。「あいつらは金がない きたない あぶない かかわってはいけない」「字も読めん 話もできん 病気がうつる 犯罪者がたくさんいる」まして昔は、もっと差別がきつかったと想像がつく。

水平社の前に 20 メーターぐらいの小さい川が流れている。このあたりに、“穢多”と呼ばれた人たちの部落が在った。水平社の川向に西光寺という寺がある、ここはこの部落の人たちの寺だったそうだ。廃牛馬解体（斃牛馬処理）権利、草場権利というらしい、を持っていたこの村の人たちは、河原で、この地方一円の牛や馬が、亡くなったとか、怪我をして使えなくなった、というものを持ってきて解体した。牛馬の肉・骨・皮・毛を取り出し利用した。草場権には、斃牛馬処理以外に、寺社祭礼時の出店を取り仕切り 10%をいただくとか、芝居や相撲などの興行権もあったという。「いわゆるテキヤの権利ですね」と解説者。この村の儲けがしらは上質な膠だそうだ。絵を描くものは、今でも膠を使う。オレもかつて利用しようと買ったこともあるが、結局使わなかった。半世紀前に化学糊が発見されるまでは、糊としていろんなところで利用された。いろんなものをひっつける糊、写真フィルム・マッチ、さまざまに利用され、この村は裕福な村であったそうだ。

シ・ノウ・コウショウ・エタ・ヒニン。この言葉を久しぶりに聞いた。水平社の解説員から発せられた。大正時代から始まった“部落解放運動”奈良のここから始まった運動が、京都市の岡崎公会堂で“水平社宣言”を読み上げ、“全国水平社”があらわれた。そのさわりをちょっと。

全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ。長い間虐められてきた兄弟よ<略>我々の祖先は自由・平等の渴望者であり、実行者であった。陋劣なる階級政策の犠牲者であり、男らしき産業的殉教者であったのだ。ケモノの皮を剥ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剥ぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代価として、温かい人間の心臓を引き裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられ…<略>吾々がエタであることを誇りえる時が来たのだ。<略>祖先を辱め、人間を冒瀆してはならぬ…<略>人の世に熱あれ、人間（じんかん）に光あれ。

この運動が始まって、百年近くたった今、部落差別は徐々に少なくなってきた、今の我々世代の人間がしてきた、部落差別行為は、次の世代にはもっと少なくなるだろう。部落差別だけでなく、近隣の国々の人たちへの差別、アイヌや沖縄の人たちへの差別も少なくなるだろう。弱いもの、女性、障害者、こんな差別も少なくなっていかなければいけない。

中国の 2000 年前の思想家、孔子の教えは、国を治める、民を治める、ということを読いた。仁・義・礼・智・信を読いた。そんな言葉を利用して、昔から、ジジイやババア、エライサンと呼ばれる長から、やくざ屋さんまで、おかしなことをのたまう。「人間は 仁徳がないといけない お前には欠けている」「わたしに 不義理はするな」「オレに 礼をつくせ」と弱者に向かってさんざん小言を言う、脅す、恫喝する。

「おいおい じいさん ばあさん 若いころは 見向きもしなかった そんな言葉 今さら使うでないぞ」「おいおい じいさん ばあさん もういいかげん おとなしく 静かにすればいいのでは」身体は弱る一方なのに、指導力がないのに指導したが、人望がないのに人の上に立ちたがり、金だ、地位だ、名誉だ、と欲望の衰えない老人たち、年金生活のうるさい老人たち、オレも含めて、よくないねえ、この存在は。

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館にもいった。時間が少なく残念だったが、ここ内容は、いつ来ても素晴らしい。普段、65 歳以上は無料、今回は特別展で 500 円也。

ネットで水平社のことを調べているうちに、「水平社博物館前差別街宣事件」を知った。2011年「在日特権を許さない市民の会」(在特会)が、「博物館がおこなった 特別展示に対して その歴史認識を 抗議する」という目的で、博物館前で街宣活動をおこなった。水平社博物館で特別展示が行われた。「コリアと日本 韓国併合から100年」と題する特別展だ。この特別展示会は、日本の朝鮮植民地政策にスポットを当て、展示で、戦時中日本政府が行ったとされる強制連行で、「日本政府によって 多くの朝鮮人が強制連行された」「連行された女性の中には 慰安婦として 従軍させられたものもいた」という解説がなされた。

在特会<在日特権を許さない市民の会>のK氏は、強制連行や従軍慰安婦の存在を否定する、水平社博物館の特別展示の論調・解説とは異なる歴史認識を持っていた。K氏は「水平社博物館による歴史捏造」と考え、抗議行動をおこなった。K氏は、一人で日章旗を掲げ館のまわりを練り歩く街宣抗議活動を行い、抗議行動をした。◎オレは思うが、この男、オレより25歳ぐらい若い彼、この行動力には感心する。一人で博物館にやってきて、マイクを持って1時間ぐらい街宣活動をしたようだ。内容は差別発言、論理というより、虐め、人の痛いところを突く、人の心を棒で打擲しているように感じる。

糾弾という言葉が水平社博物館の内部で書かれていた。糾弾闘争だと書かれていた。「強いやつ 体制をがちり握っているやつ そんな奴らと戦うときは 団結して 無鉄砲に徹底的に糾弾して 戦わねば・・・」虐め、人の痛いところを突く、人の心を棒で打擲してくる相手には、徹底的に糾弾してしまえということかな。

街宣内容抜粋：なぜここでこうやってマイクを持って叫んでいるかといいますと、この目の前にある穢多博物館ですか、非人博物館ですか、・・・(朝鮮半島より)強制連行された女性の中には、慰安婦イコール性奴隷として軍隊に従属させられた、性的奉仕を強いられた人もいました、と書かれています。この水平社博物館、ド穢多どもは、慰安婦イコール性奴隷だといっている。文句があったら出てこい。穢多ども。非人。非人。

韓国の慰安婦像があちこちに飾られている、「先の戦争で 日本は 当時の若い韓国女性を強制連行して 慰安婦として働かせた」マスコミの報道がどこまで本当なのか信用していないが、韓国内はもちろん諸外国のあちこちにこの像が飾られているらしい。当然ながらオレも日本人の一人として、「いやだなあ」と思っている。戦争という狂気のさなか、まして激昂し興奮していた当時の軍隊が、「なんでもあり」という感覚で、常識では考えられないようなことしたのであろうと思っている。

その反対に、「日本は植民地政策で 公共施設・土木建築・社会制度・医療から教育まで 彼らのためにたくさんのいいことを残してきた」「労働者の強制連行なんてありえない むしろ 出稼ぎで 金儲けで 日本に労働者としてやってきた」というような意見も聞いた。聞いた当初は、「へええ 同世代の人が こういうことをいうのか」と驚き感心した。戦争という狂気、敗戦という惨劇、オレが二十歳ぐらいまではまだまだ飢餓の状態の国力、アメリカの画像映像を見るに、「夢の国」と思われた。鎖につながれた本物の奴隷がいなくなったのもそんな昔ではない。欧米で黒人差別が無くなったのもそんな昔ではない。奴隷だとか、差別だとか、これは狂気の沙汰だけれど、人間そのものが、性悪であり、乱暴であり、暴力的であり、殺人を好む動物かもしれないね。

オレは、「人間は 性善なものである」思っていたが、最近は、「人間は 性悪である」「動物も 性悪である」と思っている。先日河原でストレッチ体操をしながら白いサギを見ていた。同じような大きさなので雄か雌か、親か子かはわからない3羽が流れの中で立っている、静かに動き回っている。3羽の中の1羽が50メートルぐらい離れたところにぼつりといった1羽に向かって攻撃を加えた。サギの攻撃は、まっすぐ飛んで行って頭上を体当たりするような攻撃だ。攻撃された方はさっと体をかわし、左右に逃げる。攻撃の1羽も二の矢三の矢と攻撃を仕掛け、元の3匹のところに戻って行った。「あれは どういう行動かな」テリトリー争いか、異性間争いか、同性間争いか、その辺のところはわからないが、「おお やってますな けんか」としばらく見ていた。

前川・福田さまさまのお二人を誘って比良に向かった。久しぶりの比良登山、オレの定番コース、北小松駅から比良駅までぐるり回るコースを計画した。ネットの山サイトを検索すると、7時間半もかかると書いてある、「えええ そんなにかかるかなあ 北小松駅に9時に着けば 比良駅 暗くなるかな」と心配した。多少、心配したが、このコース、オレの定番コース、「健脚の 二人を連れて どんどん 歩けば だいじょうぶ」

十年前までは、地図に載っているコースタイム、「30%引きがオレ」「20Kを超える 荷があれば 100%」といつも思っていたが、65歳を過ぎたあたりから、普通に歩いて100%になってきた、今や130%とだんだん体力の衰えを実感している。この定番コースも、何年か前までは、まだ寄り道して武奈ヶ岳に登り、「ああ しんど」と比良駅のホームに立っていたのを、時の流れを恨んで、思い出す。

7:45JR 茨木駅ホームの前の方に集合、高槻行きの各駅停車で高槻駅へ、階段を上がり8:01 発、敦賀行き新快速に乗り換えた。この電車は早い、1時間弱で北小松に着く。いつ頃から新快速が走り出したのか知らないが、30年以上前、故阪口さんと比良の帰り座席に腰掛け、アルコールを飲み、ゆっくり各駅停車の湖西線で京都まで帰ったのを思い出す。余談はさておき、北小松駅の改札を出て靴のひもを締めなおし、上着を脱いで歩き出した。

1時間で涼峠にやってきた。健脚の二人、余裕の表情。いつもここで一回目の休憩をとる、一本目ということで、夏でも冬でも大汗をかいてここまで登ってくる、いつもここで何かを食べる、今日も菓子パンを一つ出してほおばった。朝は炊き立ての御飯をくった。朝食はいつもパンですが、今日はパンが少ないかなと御飯を食った。パンの話は初めてですか、一度書かなくてはと申しますが、パン好きのオレ、パン焼き機を買おうか買うまいか散々迷った末、サンバード社製品を買いました。気に入っているのがフランスパン風の食パン、これは旨い、手造りのこのパンを食いだすと、市販の100円150円とスーパーで売っているパンが食えなくなった。日々造りながら、「パンはメリケン粉の ばけものか」と思うぐらいにメリケン粉を消費していく。しみじみ考えてみれば、人間は穀物を食うことで、飢えを知らないのかな、肉よりも、野菜よりも、穀物がオレの腹にいい、オレの身体にいい。なんていうと未開の国で飢えに苦しんでいる方々に失礼だけれど、食ってます。

一か月前に登った福井県の赤兎山の黄色、ブナの葉がレモンイエローに色付き、淡い黄色の風に包まれているように感じた。今、ここの山は赤っぽい黄色、一か月の時間の経過の結果か、この地方のそれなのか、オレの勝手な感性ではレモンイエローの風が忘れられない。普通に黄いろい、普通に赤い、「それはだめだよ」なんて自然の営みに失礼だけれど、「許してくれ でも あの淡い黄色がよかったぜ」今日は雲一つない青空、落葉しかけた木もこの暖かさで春が来たのかと若草色の葉を付けているやつもいる。でっかい石の塊がいつ来てもある、どっしり座っている、四角い石だ、花崗岩だ。

二本目を半分も登っている時、斜面が急になりだし、枝や根っこを掴んで登っている時、うしろの福田さんが、「いてて ぶちっと いった 足が ふくらはぎが いてて」という、「つった?」「肉離れ?」「薬ですから 飲んで」「10分ぐらいで おさまる」オレのポシエットに入っている薬を渡した。「肉離れに 効くんだよ」「ついたら 飲めばいい」ともらっていた漢方薬の“芍薬甘草湯”を渡した。「ポカリスエットの 粉を飲むのも 効くよ」と聞いていたので最近、山でポカリスエットを飲むようにしている。前川さんが、凍った水を持っていたのでそれを患部に当ててしばった。「いてて」なかなか治らない、これは、「つった」というぐらいではなさそう、この痛みでは登れない、しばらく様子を見ようと思ったが、この時点で登山を中止して下山を決めた。「1時間ぐらい休憩しよう 11時なのでちょっとだけわがまま ちょっとだけ上に向かって歩きたい」荷を置いて空身で少し上に登らせてもらった。三人で弁当を食った。「歩けなかったら 担げない あの巨体」と考えた、普通に下っても1時間はかかる距離、「なんとか歩けそう なんとか治ってきた」と明るい声。そろりそろり、幹を掴み、枝を掴み、地面に手をつけて、時間はかかるが歩ける、助かった、よかった。3時ころには北小松駅から電車に乗ることができた。「一時はどうなることやら あせったよ」と笑い。

民衆史の遺産〈遊女〉の中、瀧川政次郎著〈遊女の歴史〉はじめに、本書は堅苦しい歴史の研究所であって、粋な好事家の書いた遊女の歴史、花街の沿革史とは類を異にするものである。書物の表題だけを見て、艶冶放蕩の気持ちに誘われて、必ずや失望して本書を擲つてであろう。と先生おっしゃる通りにすぐに、ギブアップした。

最後の方に、遊女の表芸と裏芸という項がある。遊女は芸能をもって宴席にはべる芸能人であると同時に、女体をもって枕席にはべる売笑婦である。閨房の秘儀に練達して男性をして性的愉悦を満喫せしめる技能を備えなければならない。中国では房中術が研究され、日本にも伝わっていた。難しい漢文には、擲った。

網野善彦著〈中世の女性と遊女〉この話以前にも読んだ、当ブログに書いたかもしれないが・・・。戦国時代から織豊時代にかけて35年間日本に在住したポルトガル人宣教師：ルイス・フロイス著〈日欧文化比較〉の中で、日本の社会・生活・風俗のことが書かれている。いろいろな項目が書かれているらしい。この本は面白そう。

◎日本の女性は純潔を重んじない。それを欠いても、名誉も失わなければ、結婚もできる。

◎日本の女性は娘も含め、何日も好きのところ（外泊や旅）に行ける自由を持っている。

◎妻は自ら財産を持ち、夫にそれを高利で貸し付けることもあり、妻が夫を離別することもあった。

◎墮胎はきわめて普通のことである。

◎EUでは女性は文字を書かないが、日本の高貴な女性は、文字を知らなければ価値が下がると考えている。平安後期以降の日記は、東西の諸外国に比べその比類のみないところの多さである。

◎離婚も多かった。夫の「離縁状」ばかりでなく、妻の「飛び出し離婚」も多かった。

◎EUでは女性が何らかの理由で、どこかの紳士の家に身を寄せたら、そこで好意と援助を受け無事置かれるが、日本では、どこかの殿の家に身を寄せたなら、自由を失い、捕らわれの身となる。

◎社寺参籠の場で男女が入り混じって雑魚寝している絵巻物が残っている。男女の自由な交渉が行われたらしい。先生：ルイスは宗教的倫理感から、日本の女性が性的にルーズ、奔放、子供を大事にしない、など書いている。ただ日本人は宗教的倫理によって規制されない故、男女の自由な関係が保たれ、一生の伴侶を見出すことができた。自由に旅することによって人生経験を身に着けることができた。〈日本びいき？かな〉

◎古代の巫女、古代の遊行女婦、平安後期以降、津泊や宿に本拠を置いて遍歴しつつ、長者に率いられて自立した集団の遊女、傀儡、白拍子たちも、「公庭」「朝廷」に属するものといわれ朝廷の儀式などに奉仕していた。これらの女性たちは、その芸能を通じて天皇・神などの、「聖なるもの」に奉仕し、それに直属する。鎌倉時代までは、遊女・傀儡・白拍子の社会的地位は決して低くなかったので、天皇や貴族の子を産み、勅撰和歌集にその和歌を採られた人のいたことはよく知られた事実である。

◎市女笠をかぶり顔を隠し、桂（うちぎ）を着てかけだすきをつけ、はばきを付け、草鞋を履くという旅装束、後の巡礼姿と同様に世俗から離れ、「聖なる世界」に行く女性と見られたであろう。中世、鎌倉、南北朝時代までは、神仏など、「聖なるもの」とつながりによって支えられており、遍歴する職能民にせよ、一般女性にせよ、旅姿の女性にたやすく手をかけることははばかられた。道路、橋、津泊、市、宿、寺社など、旅する人々の通る場そのものも、世俗の縁の及ばぬ、「聖なる場所」として、そこで起こったことは、その場のみで処理し、世俗に及ぼさないという根深い慣習が女性の旅を容易にした。

◎遊女、白拍子など女性職能民集団が、長者に率いられ、津、泊、傀儡といわれ宿を置き、京・鎌倉を遍歴する一方、「公庭の所属」として宮廷行事に加わった。天皇・上皇・貴族に寵愛され子を産んだ遊女、白拍子がたくさんいた。そんな母がいても官位の昇進をなんら妨げなかった。江戸期に見られる困窮のための身売りを想定できない。遊女、白拍子が女性官人・女房の世界と密接な関係にあり、また逆に、女房たち自身、「遊女的」あり方を示している。宮廷の中の「愛の遍歴」「乱倫」これがこのころの女房の一般的な在り方ではなからうか。

◎男尊女卑、黙って男に従っている、自由さが無い女性像、江戸時代以前は女性も強かったんだねえ。

NHK著<日本人はるかな旅-2>以前にもこの本を図書館から借りてきた、その時、「鬼界カルデラ」「九州の縄文人」という話が出ていたが、「知らないねえ～」「本当かね～」と興味は薄かった。最近になって、カルデラ噴火の話、沖縄・南九州の古代遺跡、という話がちらほら耳に入ってくるので、改めてネットで検索したりしていた。地震の先生が言うには、鬼界カルデラは直径 20 キロの噴火口を持つ巨大な火山らしい。雲仙普賢岳の百倍という、過去一万年の日本火山史のなかで最大の噴火だった。火山灰が九州一円に、遠く東北地方まで飛散したという。日本には過去にこのクラスのカルデラ大噴火を起こした場所が何か所かある。そんな大噴火がいつまた起こるとも限らない、それこそ詐欺師じゃあるまいが、「明日に起こるやら、明後日に起こるやら」とおっしゃる。大噴火のための対策も取っておかなければならないとおっしゃるが、このような巨大噴火の対策といわれても、「そらあ 死ぬしかないぞ」「日本沈没かな」ということになるのでは。

これまで長年にわたって縄文文化は、東日本が発生の地だといわれてきました。長野、関東、だけでなく、北陸、東北、そして北海道などに遺跡が集中していた。1995 年以降、鹿児島島の遺跡発掘は驚きをもって迎えられた。ただ九州の縄文は少し違った特徴を持っていた。

◎土器：縄文の名前の起源である縄目模様の土器ではなく、貝殻でギザギザ模様がついている。

◎石斧：丸木舟を作るための道具、世界最古の船作りのいわれる丸ノミ形の石の斧が出土している。

◎石蒸し焼き：住居跡の周囲から、石を集めた炉の跡と想像される施設がいくつも発掘された。南太平洋の島々でよくみられる調理施設と似ている。

◎燻製施設：トンネルで結ばれた二つの穴の中から動物の脂肪酸が検出され、燻製加工施設だと考えられる。

NHKのこれら一連の本、「日本人はどこから来たのか」という話題を、最新の新しい研究を伝えている。日本人のルーツは、北ルート：マンモスハンターとして、食料のマンモスを追いかけて、当時氷河期故に潮位が下がり、陸続きの北海道へやってきたというのだ。そして新たな南ルート、丸木舟に乗って、黒潮に乗って、点々と島伝いにやってきたのではというのだ。日本人と顔がそっくりなシベリアの極寒地の人々と、今のジャワあたりから海を越えてやってきた人々がいるのではないかと解説している。圧巻は沖縄で発掘された遺跡から人体の完全に近い人骨が出たこと、顔の復元も見る事ができる、「こういうおっさん あちこちにいるね」と思われる顔がこちらを向いている。

◎年表図を見ると、10 万年前、ホモサピエンスがアフリカを出て、スンダランドに至る。5.6 万年前、海を渡りオーストラリアに。3 万年前、スンダランドから日本へ、南九州でホモサピエンスが生活していた。2.5 万年前沖縄でホモサピエンスが生活していた。2.3 万年前（2.9 万年前の説アリ）、始良（アイラ）カルデラ噴火。2 万年前、最終氷期が終わり地球温暖化。1.3 万年前、日本列島に縄文人が暮らしていた。1.2 万年前、南九州で縄文人暮らしていた。6300 年前、鬼界カルデラ噴火。

火山が集中している日本、世界の活火山の 7%が日本にあるらしい。108 の活火山があるが近畿、四国はゼロだ。世界地図で活火山と地震が重なっているのがわかる、どちらが先なのかはわからないが、噴火と地震は一体らしい。そのプレートが 4 枚も重なっている日本、地球物理学の先生によると、火山噴火も地震も、「いつ起きてもおかしくない いつ起こるかもわからない」という。大噴火が起こると、1 億人ぐらいの犠牲があるという。世界の文明が始まって 4000 年、日本の歴史が知られるようになって 1500 年、一番最近におこった鬼界カルデラ大噴火は 6500 年前で、その記録やニュースは伝わらない、歴史には載っていない。現在、あれと同クラスの大噴火が起これば、まさしく日本全は滅らしい。その大噴火がいつ起こるかもわからないという。

こんな話を聞くと気宇壮大に、時空を超えて、天空を眺め、霞を食って、笑っていなければいけない。「今ある原子力発電所は使わなければもったいない 事故の話なんて 気宇壮大に吹っ飛ばせ」とうそぶく髭親爺かな。

“一向一揆”この言葉は教科書で習って、よく知っている言葉だけれど、「なんだったのか」と詳しくは知らなかった。この時代、新しい仏教宗派がたくさんできた、傑僧がたくさんいた、五つ六つのその名、僧侶は浮かんでくるのだが、ただ知っているだけ。何か動いた、このわけがわからない部分が魅力的だ。

◎神田千里先生：一向一揆とは15C～16Cにかけて行われた、真宗本願寺門徒の一揆、結束した集団、およびその集団による武装蜂起を指すもの。加賀一向一揆（百年間の自治）と石山合戦（十年）がよく知られている。

◎“一向宗”とは鎌倉時代の浄土宗の僧“一向”が始めた宗派だけれど、江戸幕府によって“時宗一向派”とされ、さらに、浄土真宗本願寺集団を指す呼称となった。浄土真宗本願寺集団内部ではこの呼称は使わない。

◎加賀一向一揆が起こる前から、本願寺派でない浄土真宗は、滋賀、福井、石川で信徒をもっていた。

◎応仁の乱：八代足利将軍の將軍職跡目争いが10年続く。八代足利将軍の弟と子供の戦い。西軍：山名持豊：義尚（子ども）X東軍：細川勝元：義視（弟）。関係者多数で、裏切りが多発、誰が誰やら状態らしい。戦場となった京都は荒れ、戦国の時代に突入、皇族・公家・寺社の荘園が土着の武士たちに奪われていく。

◎加賀でも応仁の乱に呼応し、内乱がおきる。富樫家を助ける目的で蓮如が信徒の援軍を送るが、富樫家と一向宗の間でも内紛が起き、ついに一向宗は富樫家の高尾城を攻め滅ぼした、土一揆が武士集団に勝った。

◎一揆軍が武士軍団を破る。一揆軍とは農民が主なのか、宗教の繋がりだけなのか、あぶれ侍が加担したのか、おそろべし素人集団。「百姓の持ちたる国」といわれるが、自治は本当にうまく回ったのか。

◎本願寺と延暦寺の争い。比叡山より出て行ったヤツが、ワレラ比叡山に比べ、より崇められ、より信者が多い、許せない、ということかな。武装した僧兵・百姓・ならず者・の集団かな。

◎祇園感神院は、比叡山延暦寺が京都に強訴（朝廷に要求を突きつける集団行動）をかける時、その前線基地とした寺院であり、現在の八坂神社あたりに在った。今その境内には手に手に武器を持った異形の集団があふれかえっているのである。延暦寺の山法師、祇園社の犬神人（いぬじにん-中世神社にいる賤民）、近江からかき集められた馬借ら・ざっと見渡しただけでも150人は上回るだろう。彼らは比叡山の堂衆の下知のもと、猛々しい喊声を上げると、真一文字に本願寺へ攻めかかった。暴徒集団は境内に乱入し破壊をほしいままにした。蓮如はすんでのところまで逃げ延び、粟田口に避難した。と浪曲のような話也。

◎比叡山延暦寺が、ひとつの末寺、本願寺に対して牙をむいた。「三宝として尊ぶべき仏・法・僧を誹謗する邪道に陥っている その教を吹き込まれた愚かな男女や 卑しい老若が 各地で徒党を組み 仏像や経巻を焼き捨てたり 神々を軽侮するなど見過ごせない まさに仏敵 まさに神敵 制裁を加えなくてはならない」

◎まず宗祖“親鸞”あまりにも孤高で、凡夫に徹する道を選んだため、その姿は長らく霏に包まれすぎ、歴史学者の中にはその存在さえ疑う人もいた。1921年：妻に宛てた自筆の書状が、実在を公式に認知された。

◎一向一揆の話の中に、“蓮如”という僧の名が出てくる。知らなかった人だけれど・・・親鸞の死後200年、没落していた本願寺派を一代にして国内最大の宗教勢力に伸長させ、今の繁栄を築いた人だそう。

◎神田千里先生は蓮如のことを、宗教者ではあるが、織田信長に匹敵する、いやむしろ、織田信長のように途中で失速しない、最後まで踏ん張り通し、最高の宗教集団に仕上げた、そんなすごい人だと褒める。

「おかみ そんなものは知らない」「おかみのいうことを ハイハイとは 聞けない」いつの時代にもアウトローの人間たちがいる、と思うだけでなんだかドキドキうれしい。子供じみた言い方だが、今と違う時代、人の命など軽すぎる時代、上部に位置する人間にとって、下層階級を同じ人間とも思えず、彼らの思いや考え、希望や喜び、そんなものがやつらにあるのか、ぐらいの考え方で接していたんだろう。内戦にしろ内乱にしろ、勝てば官軍、「もうがまんならない やっつけてしまえ」と蜂起した下層階級の人たち、土一揆がなんと地方の豪族をやっつけてしまった。素人集団に戦いで負けてしまった武士団も、格好がつかないが、勝ってしまった土一揆集団も、勝利から時が経てば、国を治める方に回って頭を抱えることが多かったのでは。



◎8:00 京都東IC。車でひとり7時に家をでて、夜に葛川の河川敷で、衣川・上西両氏と合流してキャンプをする、焚火をする、酒盛りをするという予定。ふと思い出したがもう10年以上も前の11月最後の連休、澤山グループで富士登山。五合目の駐車場で仮眠をとり、エンヤコラ登った。上の方はまだまだ人がいた、運動靴の若者もいた。八号目、八号目半あたりで雪が凍りテラテラ状態。「これは無理だ」と引き返した。当日、5人が滑落。滑落といっても、滑り台状態、1キロほどで止まるらしいが、一人が死亡、他が怪我ということを知った。陰しい顔つきの救助隊とすれ違ったのを思い出した。

◎8:50 林道を歩き始めた。陽が暮れるのが早いので、人の多い武奈ヶ岳にするか、伊藤新道を登るか迷ったが、明王院横の林道に車を止めた。昔は車止めの鎖がなく、牛コバまで何度も入った思い出があるが、いつのころから入れなくなった。途中の道路は琵琶湖に行く人、日本海に行く人で祝日は混むかと思っただけ、すいていた、役所の駐車場もすいていた、林道にも1台止まっていただけ。もう12月がすぐという今日は空気がヒヤリ冷たい、標高の低いこの辺りはまだ色づいた葉が枝に残っている、朝陽を受けきり光っている。

◎林道の途中に明王院の滝修業の階段がある。明王院は平安時代からの寺、比叡山：天台宗の末寺だそうだ。山野を歩き回る回峰、不眠不休の読経、滝に打たれる、という修業が続くらしい。そこらあたりのおっさん、修業だといって、何度か滝に打たれ、何度か山野を駆けめぐっても、「ソラア 簡単に 解脱はできんぞ」

◎伊藤新道を登り始めた、けっこうな急斜面、鉄塔まで2時間ぐらいかな。地図を忘れてきた、これがあとで大反省するのだが。この道は水が流れ落ちる小川沿いの道、陽が当たらずうすら寒い、今年初めて毛糸の帽子をかぶっている。水を眺めて、おにぎり2本、旨い。

◎2時間20分で登ってきた、息も荒く、ゼ〜ゼ〜ハ〜ハ〜、白滝山1022Mを右に。若い女性が後ろから来た。「ひとりで こんな場所 すごいね」「池が好きです 雪の前に 池を見たくて」「オレは ぐるり反時計回り」「わたしは 金糞から帰ります」 このあたりの樹々は落葉樹でもう枝しか見えない、風で枝が折れた跡、大阪京都に比べ台風の影響は少ない模様。クリ・クヌギ・カシ・ナラかなかなである。

◎池は5コぐらいあるのかな、テニスコートの大きさ、グラウンドの大きさ、水面がまわりの樹々を写した池、ひややかに冷たく静かな池、黄色く枯れた水草が顔を出し、中洲を作っている池もある。ポコリポコリの地形、右も左も同じような地形、向こうに見える高架電線頼りに進めば、迷うことはない、打見山がある琵琶湖バレーの下、木戸峠に出る。

◎池のそばで弁当を食べた。おにぎりは昨日の昼に作ってあった。朝にピーマンと生シイタケを炒め、卵をかき混ぜ作ったオムレツをアルミホイルで包んで持ってきた。横着をして箸を出さず、手がべちょべちょ、土をこすりつけきれいになったとにやり。

◎道を見つけられず、電線を見て上り下り、又リボンを発見、道を発見、ポコリンポコリン上り下りをやり過ごしていく。鉄塔を4.3本越えると打見山のスキー場建物が目の前に見えてくる、草の上を歩くのは気持ちがいい。この道は電力会社の保守点検用道路、ただ今まで、どこの山でも作業員の働く姿を見たことはない。

◎ま新しいピンクのリボンが木の枝に、幹に、風にそよいでいる。電線保守点検の人たちが付けたのかと思っていたが、他の登山道にもある、このリボンはありがたいね。

◎電線の下を90分歩いたところで、リフトの下に来た。ここから木戸峠を通過して比良の縦走路を北に向かう。「いやあ いささか疲れてきたね」2年前に福井で膝を痛めたが、その半年ぐらい前にここで渡渉途中に大きな岩に膝頭を打ち、「いてて」というのを思い出す。あの、「いてて」が福井の、「いてて」につながったのかな。

◎ここだろうと歩きだしたがどうも違う、「金糞峠に向かう道は もっと 踏み締められているはず」と引き返しもう一つ向こうの尾根にたどり着いた、15分ほどのロス、ぼちぼち暗くなる時間を計算し、「5時には 林道に 出なければ」とあせりだした。比良山系は、標高が千Mぐらいの山域、もう12月に入れば、いつ雪が降ってもおかしくない場所、風は冷たい。ここまできると琵琶湖がまる見え、湖面が鉛色に光っている、樹々の枝にはもう緑はない。今日は快晴だと期待していたが、うすぼんやりと太陽があるだけ、空全体が雲に覆われている。

◎1:45 比良岳まで来たが、左へ曲がる三差路がまだ出てこない。ここで地図の無いことが悔やまれる、「三差路まで何分で着けるか、三差路が見つかるか 先ほど鉄塔最終地点で 坊村への標識があった ええい引き返そう」

◎2:15 スキー場のリフト下、「坊村・夫婦滝」と書かれた標識にやってきた、初めての道だけど迷っている場合ではないと歩きだした。もとは林道か、と思わせる幅の道、間違いはないだろうとどんどん進んだ。夫婦滝は以前来たことがある、牛コバから夫婦滝、池を散策して伊藤新道を下ったのか、あまり印象に残っていない。思い出すのはなんだか歩きにくい川沿いの道だった。道はまさにそれで、まともに橋があったのは1.2か所、あとは岩の上をまたいで何度も渡渉、斜面の極細道をトラバース、「なにい ここ 行けるか」そんな斜面を横切る道が崩れている 5M向こうまで道がない。ええいと靴で土をけて、足の置き場を作り、「どうぞ 落ちませんように」と祈りつつ、その5Mを超えた。20回ぐらいの渡渉、だんだん水量が多くなり、石の上もなんだか滑る。こんなところでずっとんころりんでは、大怪我か、命が危ない、これまたええい、靴のまま水に入った。靴の中はびちょびちょである。昔、来たはずなんだが、見知った場所はないか、思い出すがそんな場所はない。川の両サイド、行ったり来たり、上へ下へ、そのつど標識リボンが見えるわけでもなし、このまま日が暮れると道が見えない、リボンが見つけれない、「やばいやばい」と大いにあせり、大いに気力をふりしぼって進んだ。

◎4:00「おお 林道が見える でた 牛コバ」見知った牛コバ、ここまでくれば林道を歩いて40分ぐらいで車まで行ける、「やれやれ」である。こんなところで夜を明かしたくないもんね、がははである。黄昏には少し早い、ほっとして湧水を汲みパンを食べ、しばらく休憩した。サルが盛んに鳴いている、いよいよ獣君の時間かな。

◎先日来、体調が悪いと思っていたが、今日8時間思い切り歩いて、気力体力が充実している。オレも一人前に都会の煩雑のストレスを感じているのかな、山に来ると気分がいい、気持ちがいい。しかし、地図を持ってこなかった、コースの下調べをしなかった、前日、子どもがやってきてえらくはしゃぎすぎた、大反省である。伊藤新道、楽しかった、えらく冒険ができた、大満足の山でした。

◎5時過ぎに衣川・上西のお二人がいるキャンプ場にやってきた。「おでんを 残しているよ」「薪を 持ってきたよ」お二人はもう酒を飲み始めて楽しそうにご機嫌だ、最近、はまっている探鳥の話が弾む。「トビがえさを狙う 鴨川のヤツと同じで 人の持っているものを かつさらっていく」二人は日本酒を飲んでいる、オレは持参のウイスキーをちびり。おでんをいただき、野菜をゆで、ポン酢でいただく。何を話したか右から左、楽しい時間が過ぎていく。焚火も燃えている、うちわで煽ぐ、炎が燃え上がる、赤い炎、黄色い炎、焚火があると寒くはないが、灰が舞い上がる、煙が回り巡ってけむい、目が痛い、だんだん酒が進む。六分目は入っていたウイスキーが空になってしまった、酒ちょうだいと飲むが、ウイスキーのあとの酒は旨くない、時間が経っていく、車の中に入って寝た、寒いと思ったら窓が開いているが、いいかとそのまま寝た。

◎翌日は昨日の野菜とうどんだ。「朝は食いたくない 仕事で昼が 2時ぐらいになるので 無理して食ってる朝飯は食いたくない」と衣川さんの弁。大食漢のオレだけど、夜はほとんど食わない、菜っ葉と豆腐、おでんを食うと腹いっぱいだ。オレは、朝は食うぞ、昼も食うぞ、である。昨日の山で残ったパンも食べた。

◎「さあ 探鳥」ということで、「高島市立新旭水鳥観察センター」にやってきた。10時のオープンまで30分ある、浜辺を散策した。静かな湖面、草が、樹が、晴れた空、温かい風がそよぐ。昨日の冷たさが嘘のように暖かい、ダウンを脱ぎ、防寒シャツを脱ぎ、水辺を歩いた。お二人は新たに双眼鏡を買ったという、「8倍の双眼鏡 見える見える」とはしゃいでおられる。上西さんは若いころから探鳥好きで、鳥の話はなかなか堂に入っている。

◎センターの前、細いアンちゃん（石川和人:生物の先生）が自転車で行ってきた。200円を払って中に入った。ズラリ望遠鏡、「使い方は知っていますか」「いえ」「ここを回すとピントがあいます」カメラのように、近眼調整はないのかと疑いながらピントを合わせると、「えええ なんと よく見える 遠いところの 裸眼で見えない鳥が 船の人の姿が 見える」「ミサゴがとまっていますよ」驚いて望遠鏡で探した。「白鳥が3羽いますよ」またまた驚いて望遠鏡で探した。野生のミサゴ、とまっているだけだが、すごい。ミサゴは鶺鴒ぐらいの大きさ、魚を捕る猛禽類。シベリヤからお越しの白鳥、白く光る湖面に、白い姿、すごい。